

平成27年11月30日

岩美町議会
議長 船 木 祥 一 様

岩美町議会
総務教育常任委員会
委員長 田 中 伸 吾

委員会行政事務調査報告書

岩美町議会総務教育常任委員会は、平成27年10月28日に長野県富士見町、10月29日に同県安曇野市、10月30日に同県小布施町で行政事務調査を行いましたので、岩美町議会会議規則第77条の規定により別紙のとおり報告します。

1. 調査事項及び調査期日

- (1) 調査先1 長野県富士見町
調査事項 ▼「教育のまち」づくり実現に向けた施策について
▼乳幼児期から小・中学校への一貫した子育て支援策について
調査期日 平成27年10月28日(水)午後2時00分～午後4時00分
- (2) 調査先2 長野県安曇野市
調査事項 ▼交流事業、地域資源を活かした観光振興策について
調査期日 平成27年10月29日(木)午後1時00分～午後3時00分
- (3) 調査先3 長野県小布施町
調査事項 ▼景観整備とまちづくり施策、観光振興施策について
▼町立図書館「まちとしょテラソ」構想理念と管理・運営について
調査期日 平成27年10月30日(金)午後1時00分～午後4時15分

2. 出席委員

総務教育常任委員会

委員長 田中 伸吾 副委員長 澤 治樹

委員 日出嶋香代子 委員 杉村 宏

委員 寺垣 智章 委員 船木 祥一

随員 教育委員会事務局次長 松本 邦裕

議会事務局局長補佐 岡本 良恵

調査先1 長野県富士見町

1. 調査の目的

平成24年度より「教育の町」づくりに着手。中学生を対象とした無料塾の開講、「家庭学習の手引き」の作成、小学校1年生からの英語の授業導入、教育未来会議の開催等、すべての子どもに確かな学力を保障するための様々な取り組みをされている。

また、教育委員会に子ども課子ども支援係を設け、乳幼児期から小・中学校への一貫した子育て支援策を取り入れている。取り組みに至る経過とその状況を調査する。

2. 富士見町の概要

富士見町は、長野県の南東部、諏訪地方の東端、八ヶ岳と赤石山脈(南アルプス)北端の入笠山に挟まれた、標高900-1400mの高原地帯に位置し、山梨県と県境を接している。JR中央東線が通り山梨県境側より信濃境駅・富士見駅・すずらんの里駅の3駅があり、国道20号線が町内を横断、また中央自動車道諏訪南ICからは首都圏へ2時間余、中京方面へは2時間半と利便性に恵まれた町である。

昭和30年4月、富士見村・境村・本郷村・落合村が合併。4ヵ村からもともに日本一の富士山を眺めることができることから「富士見町」となり、今年度60周年を迎えた。

人口は、合併当時17,000人余りであったが、現在15,076人(H27.10.1現在)、世帯数

5,886世帯。宅地分譲で人口が盛り返した時期もあったが、平成17年をピークに減少している。

古く縄文時代から農業を中心に発展してきたが、現在はハイテク産業の町、避暑やスキーなどの観光の町として発展しつつある。

3. 調査事項

▼「教育のまち」づくり実現に向けた施策について

①地域ぐるみで子どもを育て、地域も元気になる仕組みづくり

教育のまちづくりのキーワード『つなげる』の下、地域ぐるみで子どもを育て、地域も元気になる仕組みづくりとして、「信州型コミュニティスクール」を導入。

子どもにとっては、学ぶ意欲や学力・体力の向上、感謝や思いやりの心を育み、地域にとっては、地域の絆やネットワークづくり、学びや生きがいがいづくりに繋がり、学校・保育園にとっては、登下校時の安全確保や取組の評価、改善に繋がっている。

〈保育所：5園 小学校：3校 中学校：1校 県立高校：1校 養護学校：1校〉

◆コミュニティスクールとは…学校や保育園を文化や学びの核とし地域も子育てに加わることで地域も元気になる仕組み。安曇野市では、「信州型」と称し、学校運営・経営・人事にまで具申せず、学校の独自性を重んじ支援する仕方を取り入れている。

②子どもたちの確かな学力向上を目指した取り組み

主体的・積極的に学びに向かう学習改善として、アクティブラーニング（生涯にわたって学びつづける力、主体的に考える力の育成）を推進し、その実践に、例えばホワイトボードを各学校教室に配布し、グループワークに活用。外部講師による指導等も行っている。また始業前や放課後の補充学習の実施、更には外部専門業者（AtoZ社）から職員を派遣し、小1からの独自の英語教育を実践。

③子どもをのびのびと育てる環境づくり

（▼乳幼児期から小・中学校への一貫した子育て支援策について）

乳幼児期から小・中学校への一貫した支援を目的とし、教育委員会内に、学校管轄の総務学校教育係と幼児保育を管轄する子ども支援係を統括する子ども課を設置。

個々の子どもの育ちに応じた心身の発達支援として、就学時や健康診断時の心理相談・発達相談を行う。また町内総合病院での病児・病後児保育、子育てひろばなどを設ける。なお、児童クラブを6年生まで拡大し、学習の場として位置付け運用している。

保育の現状と課題として、職員112名中約56%が嘱託・臨時職員対応しているが、未満児保育の要望が多く職員確保に苦慮している。待機児童は無い。

④学びつづけるまちについて

図書館1人当たりの図書貸し出し冊数が17年連続日本一である。

後継者の育成と高齢化が問題。コミュニティスクールの役割・期待は大きい。

4. 主な質疑応答

質疑：小学校低学年からの英語教育導入のきっかけと、高学年、中学校移行への取組みの工夫は。

回答：使える英語、しゃべれる英語を子ども達に習得してほしいという思いで始めた。

外部講師（研修を積んだ外国人講師で、子どもの扱いが大変上手）で、人件費1,000万円、プログラム400万円。

質疑：信州型コミュニティースクールの指導者と予算は。

回答：地域の人材を活用したい。退職する校長を予定。人件費と諸経費 250 万円でスタート予定。

質疑：①保育園から中学校までを一貫して教育委員会が所管となり素晴らしい実績をあげておられるが、これは誰の発想か、また実現までにどのような議論があったのか。
②議会の反応はどうか。議会はどの様なかわりをしたのか。
③保護者の反応は。
④教育長と町長との思いの相違はなかったか。連携はいかに。

回答：①予算は、保育費は民生費で組んでいるが、決裁権は教育委員会となっている。前教育長が幼児教育のプロ（県立短大幼児教育の教授）で、この取組のルールを引く。前町長が全国に教育長を公募。自ら応募をされ就任された方だ。論文に“子どももの成長は一本のルールである”と記述。幼児教育に深い造詣を持っていた。

人口が 15,000 人規模の町だったので新たな取組がしやすかった。

②先進事例が無かったのでモーレツな反対はなく、お手並み拝見といったところ。
③冷静に受け止めていた。子どもにとって保育内容に大きな変化は無いので反対は無かった。ただ教育長としては、保育園でありながら幼稚園の要素も入れたい思いがあった。
④町長としては、成果を数値で示すことを求めているが、教育は成果を数値化できない為、満足度などの意識調査を示すことでご理解いただいている。

質疑：学習と部活動の両立に学校が工夫していることは。

回答：水曜日は全ての部活動はお休み。土日はどちらか 1 日。なお、朝活は 30 分以内とし月曜は無としている。水曜日には無料塾を設定。

質疑：小学校での放課後活動支援に、学校・保護者又は外部の方が関わって取り組んでいる事例があれば教えていただきたい。

回答：小学校においてクラブ活動に保護者が入っている例はある。
生涯学習においては、休日に希望者が集まってキャンプや登山をしている。

質疑：昭和の大合併以降の人口減少率が岩美町の方が高い。出生数も少ない。
人口減少対策についてお聞かせいただきたい。

回答：若者の都会への流出と高齢者人口の自然減により年間 100 人減少。
新規就農希望者の住居・農地・機械・生活資金すべてを行政が面倒を見るパッケージング方式を実施。今年度 4 年目で、計 20 組就農。また、テレワークの促進にお試し空き家住宅を活用。4 戸の利用有り。

質疑：町内立地の県立高校への町からの進学率と高校存続の支援策は。

回答：資金援助は行っていない。保育園児や小中学生と交流（芋ほりなど）している。
進学率は約 1 割強。

5. 各委員研修後記

【要旨と考察】

◎教育のまちとして取り組み

1. 『つなげる』をキーワードとして、町がコーディネーターを配置して、保育園・学校・保護者・地域とのパイプ役となり互恵関係を深め、地域の絆、ネットワークづくり等地域ぐるみで子どもを育てる取り組み。
2. 子どもたちの学力向上
 - ・アクティブラーニングの推進、外部講師による指導等。
 - ・小学校1年生からの英語教育の推進。
3. 子育てするお母さんが運営するNPO法人
 - ・子どもたちをのびのび育てる環境づくり
 - ・支援会議…何が問題か、今後どうするか。

〈考察〉同規模自治体として、幼児・園児から児童・生徒の、子どもを一体とした子育て、教育の取り組みには大いに参考となるものがあった。

特に小学校からの英語教育の取り組みは大きな関心をもった。

I C Tを取り入れ外部（外国人）講師を迎え入れて、人件費 1,000 万円、プログラム 400 万円の予算が組まれていた。

平成 24 年度からのこの取り組みは、小中一貫教育として連携しながら英語が確実に子ども達、地域に根付いているとの事であり、非常に興味深いものであった。

信州型コミュニティースクール（富士見版）の導入により、地域のボランティアと一緒に子供を育てる仕組みができています。幸いにもボランティアとしての人材が集められている。NPOによる子育てひろば「A i A i」やサポート保育「のびのび広場」、総合病院による健康診断時の心理相談や病児、病後保育も充実させている。地域が一体となり保小中の子育てに取り組む環境がつくられている。このうち、朝夕の補充学習や小学校一年からの英語教育の推進はわが町で取り入れることができないだろうか。ただ、ボランティアの人材を見つけることが可能かどうか。子育てについては決して岩美町は負けていない。

観光の面では、長野県全体が日本アルプスに囲まれているので、町として特色が出しにくい面があるのではないかと感じました。観光面より子育てをメインにしている町だと感じた。

地域ぐるみで子どもを育て、地域も元気になる仕組みづくりに取り組んでいた。

『信州型コミュニティースクール』を導入した学校と、地域が「こんな子どもを育てたい」という願いを共有しながら、一体となって子どもを育てる仕組み、また、地域と共にある学校を目指していた。

このコミュニティースクールを作り、このなかでいくつかの項目の一つに、“町のコーディネーターがパイプ役となって”とある。ここに予算化をしてコーディネーター1名を雇用したいとの説明があった。この組織を3年後には100%にするとの心がまえだった。

学力向上に取組み、子どもたちに確かな学力をつけるために「外部講師による指導」「英語教育の推進」「無料塾」などの取り組みが行われていた。

元 NEC 専務の町長が改革事業を主導している。富士見町の人口規模は岩美町より少し多い程度であるが、一般会計規模は 68 億円で、税収が 24 億円ある。そのうち 14 億円程度は大企業関連（セイコーエプソン）とのことであった。

信州型コミュニティスクール富士見版の中に、「町のコーディネーターがパイプ役となって！」とあるが、説明では退職校長に依頼したいとのことであった。外部の人が校内に入ると学校や先生としてはうかうかできないとの説明もあった。

教育委員会内の子ども課として、保育園、児童クラブ、小中学校を管轄している。保護者からの苦情などは特になかった模様だ。

岩美町においても、スクラム教育を更に進め、子どものことを一元的に所管する部署の検討を行ってもいいのではと感じた。

信州型コミュニティスクールが大変よい取り組みだと思う。子ども達にも地域の特色を教えることは、人口の流出を防ぐことにもつながると思う。

岩美町にも将来的に必要となる人材、仕事があるので、地域の方々と学校とのつながりを大切にしたい。

部活動の朝練もある町であった。学力の向上に取り組む町でもあり、部活動にも力を入れているとのこと。部活ができる子は、勉強もできるという話が印象深かった。

教育委員会に子ども課を設置し、保育園児から中学生まで一貫した教育の充実を図っている。特に英語教育は（小学 1 年から会話のできる）充実し実績を挙げている。

教育長を公募し、町にふさわしい人物を採用していることが印象にある。

なお、町長が大企業の役員から U ターンし、情熱をもって町民全体で教育にあたり、信州型コミュニティスクール富士見版の導入など成果をあげているように感じた。

6. まとめ

富士見町が進める教育の町は、地域ぐるみで子どもを育て、地域も元気になる仕組みづくりにあった。そのキーワードを『つなげる』とし、町がコーディネーターを配置して、保育園・学校・保護者・地域とのパイプ役となり互惠関係を深め、地域の絆、ネットワークづくり等がなされていた。また幼児教育から就学時教育を一貫し教育委員会子ども課で所管していた。

本町では保育所から小学校へ、小学校から中学校へと一貫した教育支援を繋げるスクラム教育に取り組んでいる。また「信州型コミュニティスクール」は本町における「特色ある学校づくり事業」と類似した取り組みであり、『まちづくりは人づくり』を教育の根幹とする本町の取り組みと共通点が多かった。

しかしながら、特に関心を寄せた取り組みは、小学校 1 年生からの英語教育であった。平成 24 年度からの取り組みで、独自の英語力育成指導により、英語が確実に子ども達、地域に根付いているとのこと。またアクティブラーニング（生涯に亘って学び続ける力、主体的に考える力）の推進や外部講師による指導など「子どもたちに確かな学力」を身に付ける教育が先進的に取組まれていた。

調査先2 長野県安曇野市

1. 調査の目的

武蔵野市との交流をはじめとする多彩な交流事業を通して、「交流人口の増加」を生み出し、観光客誘致、移住・定住人口増加に繋がる成果を上げている。

キーワード「交流人口の増加」の成功に導く、地域資源の活かし方・視点を調査し、本町の観光振興や移住・定住に向けた取り組みの参考とする。

2. 安曇野市の概要

安曇野市は長野県のほぼ中央に位置し、東西約 26.0 km、南北約 20.6 kmで、面積は 331.78 k m²。県内では 6 番目の規模になる。

平成 17 年 10 月 1 日、旧安曇野郡の豊科町、穂高町、三郷村、堀金村と東筑摩郡の明科町 5 町村が新設合併し「安曇野市」が誕生し今年 10 周年となる。

10 万人都市を目指し合併した当時の人口は 88,231 人、平成 22 年には 96,479 人、平成 27 年 10 月 1 日現在 98,452 人と微増している。

北アルプスの雄大な自然のもと、豊富な湧水、美しい農村景観、豊かな歴史・文化など多様な地域資源がある。

NHK 連続テレビ小説「おひさま」は、広く海外にまで発信され、『信州・安曇野』の認知度は向上し、近年では、住みたい街の希望地として全国的にも人気が高まっている。

3. 調査事項

▼交流事業、地域資源を活かした観光振興策について

*武蔵野市との交流事業について

現在 6 自治体と友好都市締結。そのうちの 1 つ武蔵野市との交流事業の主なものとして「武蔵野桜まつり」「むさしの青空市」への出店、地元特産品の販売である。

また、市民ツアーの開催による住民交流を行っている。

民間レベルでの交流としては、中学生 1 年生のセカンドスクール（宿泊農業自然体験学習）や少年サッカー交流などがある。（平成 26 年度は 4 事業 7 回交流）

*地域資源を生かした観光振興策について

NHK 連続テレビ小説「おひさま」の放映をきっかけに爆発的に客が増えた。

安曇野市らしい観光を展開していくための土台となる安曇野らしい暮らし方・生き方について『安曇野暮らし 5 か条』を定めている。これを来訪者とともに成長・発展させていくには、まず私たちが地域資源を再認識し、内外に誇れるまちづくりに向けて、自らが取り組み、自らが楽しむことが求められる。

来訪者との交流促進は、少子高齢化が進む中で交流人口を増やし、市民の活動の場を広げていくなどの面から社会的な活性化に寄与する。また観光振興は、農林水産業、製造業などの地域産業への経済波及効果が高く、産業の活性化という点でも期待される。活性化のキーワードは「人口交流の増加」をテーマに『安曇野市観光振興ビジョン』を策定し取り組んでいる。

ポスターは広告代理店に依頼。写真は「朝」の魅力を引き立てる写真を採用。宿泊客や長期滞在者が増えることを期待している。

特産のりんごを使った林檎ナポリタンなど観光施策に取り組んでいる。また季節の野菜スイーツフェア（5 年目）を開催。

安曇野穂高温泉郷をはじめ様々な泉質の温泉あり。ホテルやゴルフ場、個人住宅など1,500軒に温泉を供給している。

観光協会では、観光誘客業務（エージェンツ事業、外国人誘客）や着地型旅行商品の販売、アンケート調査、二次交通の運航業などを行う。

4. 主な質疑応答

質疑：町では民泊を受入れていただける方が減少している。安曇野市ではどのように対応しているか。対策はなにか。

回答：ビレッジ安曇野に受け入れをお願いしている。

兼業農家に受け入れをお願いしているが高齢化により受け入れ件数は減少しているが、農林部が積極的に農家探しをする。

質疑：観光客の調査結果は？ポスターの効果は？

回答：観光客調査結果、関東圏から30%、中京圏から20%来町。

観光ポスター作製は、広告代理店（電通）に依頼。結果観光客増加に繋がった。

質疑：①穂高温泉供給(株)の収入財源は？

②湯送管の長さはかなりの長さでしょうか。

回答：①メーターで入湯量を計り湯量に応じて換算。

②送湯管はかなりある。第3セクターで管理・運営している。

5. 各委員研修後記

【要旨と考察】

◎交流事業について

- ・「武蔵野桜まつり」「むさしの青空市」の出店、地元特産品の販売。
- ・両市市民ツアーの開催による住民交流。
- ・民間レベルでの交流 平成26年度は4事業7回の交流。

〈考察〉官でのコミュニティーは概ね似ていると思うが、交通の利便性（交通機関、距離）の点で大きく違うせいなのか、民間による交流には大きな開きがあった気がする。

◎地域資源を生かした観光振興

- ・観光客の調査結果は、関東圏30%、中京圏20%であった。

観光ポスター作製に地元の感覚だけではダメではないかと協議した結果、広告代理店（電通）にポスターを依頼。結果、観光客が増加。

〈考察〉時には視点をかえ（発想の転換）外部からの知恵を借りることも大切なことである。

◎観光のPR

NHK連続テレビ「おひさま」の放映をきっかけに訪問・観光客の増加が見られた。

〈考察〉テレビ放映をされることにより訪問・観光客の増加は間違いがない。

テレビ、映画、CMへのロケ支援事業への取り組み、ロケ用に専用的なホームページの作成、製作スタッフへの宿泊費の補助等取り組みに関心が持てた。

しかしながら、行政規模・予算は当町とは大きな違いがある。

交流事業は農業体験と民泊に重点が置かれている。受け入れ側の民泊希望者が年々増加している。理由は農林部が農家をさがしてきている点に注目したい。交流相手としてスポーツ団体や単独の学校に絞っている。壮年ソフトボールチームの交流団などこのことは編成がしやすいのではないかと。アンテナショップの売り上げがわが町の倍の売り上げをされている。原因は、販売品種のバラエティーさにあると思う。岩美町もアンテナショップの充実に努めなければならないのではないのでしょうか。

安曇野市役所は土・日曜日には市民に開放している。市役所のベランダから常念岳、北アルプスが最高の展望だった。観光については日帰りから宿泊・滞在型に繋がる取組みを進めている。観光ポスターに春夏秋冬の朝をテーマにして滞在・宿泊をめざしたポスター作りをしていた。これはすばらしい発想だった。また有数の美術館・博物館・ギャラリーや工芸作家の工房などが点在している。どの美術館にも学芸員がいて説明をしていた。これはすばらしいことだ。岩美町もめざすべきです。

安曇野市観光協会は一般社団法人となっており、観光業の許可を得て、宿泊・旅行商品のあっせん業務を行っている。

郷土を象徴する頂きとして、北アルプスの常念岳が市民の心に息づいていると感じた。

日常、仰ぎ見ることができ、観光ポスターにも冬版で朝焼けの常念が使われている。ポスターは外部の作成であるが、市民にとって当たり前とされていた風景が、一般には魅力的なものであることを再確認できた事業のように説明を受けた。

岩美町の、当たり前でありながら魅力的なものである各種資源の感動共有が外部に訴えられるものであると感じた。

◎観光振興ビジョンについて

高い山に囲まれた町で、海は無いが「朝」というテーマでポスターを作製したり、セカンドスクールという取り組みで、他県へのアピールを多くしていると思う。

テレビや映画のロケを支援して、メディアを活用した観光客の誘致はいいと思うが、一時のものにしないための取り組みもしなければならないと思う。

◎武蔵野市との交流事業について

武蔵野市以外にも多くの自治体との交流をしている。観光だけではなく農業を通じた交流を行政以外の民間の方がやっているのは、移住・定住にもつながると思う。

◎セカンドスクールについて

安曇野市内の農業などを他県の子どもの体験してもらい、興味を持ってもらえるので、岩美町でもできるのではないかと。臨海学校などでも漁業の勉強などできたらいいと思う。

6. まとめ

平成の合併後 10 周年となる安曇野市は、活性化のキーワードに「交流人口の増加」を掲げ、合併以前からの交流を引き継いで、武蔵野市ほか 6 市町と友好都市提携を締結している。また民間レベルでの交流は、平成 26 年度においては 4 事業 7 回実施しており、交流を通じて豊かな生き方を実現することを理念とした『安曇野暮らしツーリズム 5 か条』が安曇野市の観光振興や地域産業の活性化へ繋がっている。

なお、NHK 連続テレビ小説「おひさま」の放映をきっかけに訪問・観光客が一時増加。その後は、地域資源を発想の転換で、僅かではあるが人口は増加している。

また、観光客の 30%は関東圏から、20%は中京圏から訪れており、ライフスタイルが多様化しつつある昨今においては、サテライトオフィスなどのワーク形態を取り入れた定住・移住者も増えつつあるとのこと。

これらのことから、“ここにしかない” 魅力の発信は一方通行だが、交流は、魅力とぬくもりが伝わる双方向の“おもてなし” であり一時的な観光から定住・移住へ導くアイテムの一つであることと、自らが町の魅力を認識する事の大切さを改めて感じた。

調査先 3 長野県小布施町

1. 調査の目的

葛飾北斎美術館を中核とした町並修景整備に取り組み、600 年の歴史を持つ特産の栗を使った栗菓子や栗強飯の店舗が軒を連ね、全国的にも有数の観光地となった。歴史的景観を活かした町並修景整備に至った経過と第 2 次・第 3 次修景整備へと続くまちづくり施策の秘策を調査し、本町の観光振興事業の参考とする。

また、図書館設立に向けた構想理念、完成に至るまでの取組み経過、管理・運営方法について調査し、本町の図書館建設の参考とする。

2. 小布施町の概要

小布施町は、長野県の東北部、長野盆地(通称善光寺平)の東縁に位置し、標高 300~400m、面積 19.12 k m²、人口 11,219 人・3,734 世帯(平成 27 年 11 月 1 日)で、役場を軸とし半径 2 キロ以内に収まる小さな町である。四方を山と川に囲まれ、千曲川を隔てて西は長野市に、東は雁田山を挟んで高山村に、南は松川を隔て須坂市に、北は篠井川を隔て中野市に隣接している。

江戸時代後期、千曲川の水運を利用した流通が盛んになり、経済・文化の中心として栄えた。この賑わいの中から生まれた高井鴻山ら豪農・豪商が、葛飾北斎、小林一茶ら多数の文人墨客を招き、今に続く文化の薫り高い町となった。

寒暖の差が激しく夏は最高 35 度前後、冬はマイナス 10 度前後まで下がる寡雨・内陸性の気候。かつて松川が何度も氾濫し田畑を荒れ、強酸性の砂礫質に変わったことにより、色合いや風味に秀でた栗の名産に繋がった。

昭和 29 年 11 月都住村と合併、昨年合併 60 周年を迎えた。

3. 調査事項

▼景観整備とまちづくり施策、観光振興施策について

昭和 51 年、「北斎館」開館を機に町内外から多く訪れるようになる。

まちづくり基本構想により、歴史文化ゾーンを設定。昭和 57 年、栗菓子の老舗や大壁造りの民家など歴史的景観をとどめる中心地域で、並修景事業が進められる。

また平成 21 年、北斎館を中心とした町並修景地区とは趣を異にした新たな拠点の創出を図る為、第 2 町並修景事業を実施。これに先駆け平成 17 年、役場内に東京理科大学・小布施町づくり研究所を開所。将来を見据えたまちづくりの施策を研究。

なお、修景事業により生まれた移動空間や赤線には栗の木を使った小路も整備している。

この効果をまちづくりに活かすため、昭和 62 年「環境デザイン協力基準」を明確化し、「ホープ計画（地域住民計画）」を策定。平成元年には、住まいづくり相談所を、平成 4 年には「住まいづくりマニュアル」を作成。

さらに、平成 4 年には、花の情報発信基地「フローラルガーデンおぶせ」をオープン。平成 12 年には個人の庭を開放し、花仲間の交流を深める“オープンガーデン”事業を開始。当初 38 軒で始めたが今では 100 軒余り。全てボランティアで事業運営している。

4. 主な質疑応答

質疑：国道 403 号線の改良にあたっては、今後町民の皆さんのご理解ご協力等大変かと思うが、この度町並修景事業で改修された古民家などは耐震診断を確保したうえでの開業か。

回答：平成 21 年度に耐震性をクリアしたうえで実施。

昭和 58 年開館の高井鴻山記念館は、随時調査し耐震性補強している。

質疑：住まいづくり相談所の利用状況は。

回答：月 2 回開催している。町並修景事業を手掛けた東京理科大学教授自らが相談会を立案し、小布施の歴史と気候風土に適した住まいづくりを指導。波及効果は大きい。

質疑：①都市計画にも関わってされたのか。

②町営住宅への景観の配慮はなされたのか。

③東京理科大学の学生の力をどういったところで借りたのか。

回答：①都市計画は町独自で行った。S45 年設定。調整区域と区域外に分けた。

H18 年頃、調整区域人口減により景観形成重点景観区域として取り組んだ。

②H8 年度～H12 年度町営住宅を建設。小布施らしい景観に配慮した。

③H17 年役場内に、東京理科大学・小布施町まちづくり研究所を開設。まちづくりに相互に協働で取り組んだ。平成 27 年度で東京理科大学との事業は終了。今後他大学と他分野での官学協働事業を行いたいと考えている。

質疑：①駅前よりも先に南側の北斎館周辺を修景された理由は。

JR 利用者より自動車利用者の方が多からなのか。

②それぞれが提案されてもコンセプトが無ければ修景を進めかねるが。

回答：①民間からあがってきた事業で、北斎館周辺から声があがった。栗菓子老舗や大壁造りの民家など、歴史的な景観をとどめている町の中心部地域の方だ。

なお、S57 年度から第 1 町並修景事業を、S59 年度から第 2 町並修景事業、更に第 3 町並修景事業を予定しているが、町からは補助していない。

②バラバラにならないよう小布施の歴史や風土を活かしたまちづくりに配慮し選定。

質疑：誇りと生きがいを持って取組んでおられるが、オープンガーデンの維持管理費用や他人が入ることについて抵抗は無いか。盗難など。

回答：盗みはあるかもしれないがそのようなことも有り得ると理解したうえでオープンガーデンに参加している。現在 100 軒。テーマは交流で、補助金無し。したいときにする。辞めたいときに止める。

▼「まちとしょテラソ」構想理念と管理・運営について

大正 12 年、長野県下では 9 番目に公共図書館として開館。その後移転を繰り返し、昭和 54 年役場庁舎新設に伴い 3 階に設置。3 階へはエレベーターがなく利便性に欠け、電算化の遅れもあり、平成に入ると独立建物としての図書館が望まれるようになる。

平成 19 年 3 月、「図書館あり方検討会」から提出された報告書の内容を十分に尊重し、住民懇談会や意見交換会などの意見を踏まえ、4 つの柱（「学びの場」「子育ての場」「交流の場」「情報発信の場」）として、「交流と創造を楽しむ、文化の拠点」を運営の理念とした。

設計案は全国から 166 の応募があり、採取的に 5 案をプロポーザル審査。館長には 25 人募集あり。

平成 21 年 7 月竣工に向け、延べ 100 人が約 50 回検討を重ねた。（図書館運営委員会 17 回、電算化部会 10 回、建設部会 6 回、運営部会 7 回開催など。）

検討の結果設計変更した主なもの 4 点は以下のとおり。

- ①当初ワンフロアであったが、落ち着いて調べ事が出来るよう小部屋としての機能を持ちつつワークショップ可能な多目的スペースを設けた。ワンフロア概念を変えないため光や音は漏れる。
- ②丸型トイレは“たまごトイレ”と呼んでいるが、障がい者や子どもに安全であり、スタッフの目が行き届きやすい。
- ③来館者に声掛けできるよう貸借カウンターは入口に置いた。
- ④おむつ交換や授乳が出来るよう専用スペースを設けた。

活動の主なものとして、

1. 本と人をつなぐ場（新たな作品・作家との出会いを演出）

①テラソ百選…毎月テーマを設け書籍展示

②本の福袋「読本来福」

…本 2 冊を内容が推測できるキーワードを添付し書籍名が解らないよう包装。好評であった。

③スタッフお勧め本コーナー…推薦文をつけて展示

④追悼コーナー

…例えば、高倉健主演の原作本を集めた。

またあの頃コーナーも設置。新聞記事等展示（例えば東京オリンピック）

2. 本を介して人と人をつなぐ場

①図書館祭り

…「読み聞かせ」「昭和の遊び」指導、伝統文化体験

②まちじゅう図書館

…酒屋・味噌屋・銀行・郵便局などの一角に本を並べ、訪れる人と本を通しての交流を図る。10 館でスタートし現在 15 館。

3. 創作活動・表現活動を応援する場

①創作童話「花の童話大賞」の公募（花をテーマとした創作童話を全国公募）

…7 歳から 92 歳まで 1,040 編、海外から 6 編の応募あり。

②ワークショップ「本と話そう よむ・かく・つくる」…筆で年賀状づくりなど。

③絵画などの展示…押し花作家と友人らによる作品展など。

4. 子育ての場

①おはなし会…「読み聞かせ会」を月2回開催。お父さんによる読み聞かせ有り。

②小・中学校対象ワークショップ「テラソ部活」

…友達同士や親子連れのワークショップ開催。

まちとしょテラソの職員は、館長1人(5年任期)、職員7人(内2人図書館司書:臨時・パート)で運営。

休館日は火曜日で、火曜日が祝日の場合は開館。年末年始も開館。年間開館日数は310日前後で、開館日数・開館時間共に長野県内で一番。

蔵書数は、開架図書56,000冊、閉架図書40,000冊、併せて96,000冊。設計が開架40,000冊、閉架40,000冊のため既に16,000冊キャパオーバーとなっている。

現在登録者数は9,000人、来館者数は年間14万人を超え、52%が町外利用者である。

平成19年度(役場庁舎内設置の旧図書館)と比較し平成26年度は、来館者数6.3倍の141,096人、一日平均464人来館している。

4. 主な質疑応答

質疑：現在、中央公民館内に図書館を設けているが、中央公民館建て替えに伴う図書館整備を検討している。蔵書6万冊。

回答：公民館と図書館の活動は、だぶる所があるので、中央公民館内に図書館を設けることも有りと思う。もともとうちも公民館内に図書館を置いていた。

質疑：工期は。

回答：起工式が平成20年10月で竣工式が平成21年7月ですので10か月。

土地はもともと町のもの。

質疑：天井の木材は県産か。間接照明が工夫を凝らして使われていますね。

回答：天井は県産ではないと思う。間接照明は、一件暗そうに見えるが、天井と手元からとで意外と明るい。

質問：屋根の形が特徴的だが。

回答：カルデラの山の形をイメージしたもの。

ワンフロアで天井が高いので重圧感がない。また飲み物の持ち込みや私語も規制していないためか、居心地がよく何度も訪れる方が多い。

質疑：まちとしょテラソのネーミングは

回答：公募。まちとしょは、「町の図書館」の略で従来から使っており、この言葉を残した。

テラソの「テラ」はラテン語で『大地・地球』の意味。図書館から小布施町を“照らそう”のごろ合わせで“テラソ”。

質疑：登録者数9,000人のうち町外利用者は52%おられるが、登録はいつから始めたか。

回答：まちとしょテラソ開館時からの平成21年度。

小布施町は大変せまい町なので、ごみ処理など広域で行っている。せめて図書館はとの思いで始めた。

5. 各委員研修後記

【要旨と考察】

◎景観整備とまちづくり

- ・まちづくりに昭和 50 年代から取り組まれてきた。
 - ・歴史的建造物を（修景）整備し並みの面整備に取り組み、北斎館、高井鴻山記念館を中核とした歴史文化ゾーンを含め、3ゾーンのまちづくりが設定された。
歴史文化ゾーンは半径約 250m内に収まっており徒歩で散策できる。
 - ・早くから東京都内の建築家（設計事務所）がかかわり、まちづくりの景観計画が行われていた。その中で、小布施町の気候風土、美しいまちづくり等、条例・指導要綱そして、自立ビジョンの策定が着々と進められてきた。
 - ・平成 17 年には、東京理科大学が役場内に研究所を開設し新たなまちづくりの活動が始まった。
 - ・平成 21 年より、第 2 町並修景事業が実施された。
地域住民、企業等が協力し面的整備が行われ「商業」と「生活」の調和のとれた空間づくりが進められてきた。
 - ・平成 22 年には信州大学、平成 23 年には法政大学も研究所を開設した。
- 〈考察〉長年かけてまちづくり整備を住民・企業等と協働し形成されてきた。行政・補助金に頼るのではなく、民間・地域住民のまちづくりに対する意識が高く、長期にわたる建築家・大学等との連携は将来的な、まちづくりにも大きな道標になると思われた。

◎まちとしょテラソについて

- 建設にあたり、検討委員会からの内容を十分尊重し、住民懇談会・意見交換会など踏まえ 4 つの柱と運営理念を掲げ建設に動き出した。
- 設計は全国から公募。プロポーザル審査を行い決定された。
- 建設運営委員会との意見交換により、4 つの設計変更がなされた。
- 検討委員会、運営委員会において、多数の意見を多大な時間を費やしまとめるのは、相当な労力を要したとのことであった。
- テラソ内はワンフロア一段差なし・仕切りなし、照明・採光による明るいイメージ、館長・職員も利用者の視野に入る配置、図書司書 2 人をパートでの採用等、施設人員配置の点においても、幼児からお年寄りまで施設が利用し易い配慮がされていた。
- そして、まちじゅう図書館が町内の商業施設等の 15 館で展開されていることも本を通じての交流がテーマとされていた。
- 〈考察〉中央公民館建替えを踏まえ、計画・取組・運営等、参考になるべきものがあつた。

年間 120 万人の集客力のある「北斎館」を核とした街づくりがなされている。個人の古民家は修景として個人が改築をされている。行政の事業は赤線を利用し栗の木を埋め込んだ小路づくりがなされている。赤線利用の小路づくりは非常に参考になった。庭が自由に鑑賞や通行できる「オープンガーデン」には感心させられた。

昔から、北信濃の経済、文化の中心として栄えた町であるから豪商・豪農がおり、現在でもその気質が受け継がれている。観光客が増えたことにより民間投資（古民家のカフェへの改修）が盛んになされている。岩美町に来られた観光客にまちづくり団体の事業を PR し見てもらうことができないだろうか。

一番感心させられたのは、行政に頼らない町づくりと人間気質の違いを痛感させられた。

町立図書館「まちとしょテラソ」を視察する。建物は斬新で木を多く使ったおしゃれな建築でした。心配りの出来た室内と配置。特に「トイレ」の場所は職員の目の届く玉子型のかわいいものでした。蔵書数も充実した居心地の良い図書館でした。住民懇談会や意見交換会などの意見を踏まえ、この図書館は「学びの場」「子育ての場」「交流の場」「情報発信の場」を4つの柱として、「交流と創造を楽しむ文化の拠点」を運営の理念として建設に向かったとの説明でした。また町民100人で組織する建設運営委員会で、設計案を様々な角度から意見交換して修正をかけていったそうです。多くの町民がかかわり、専門家がかかわり、思いのこもった図書館であった。岩美町も公民館とは別に、図書館を建設できないかなと考えた。文化の馨る小布施町の視察でした。

「だれ一人訪れることのない信州の静かな里だった。」小布施町は年間百万人を超える観光客が訪れる町となっている。

また、町内1校の小学校において、町内28自治会が行う運動会を開催し、町の中心部と集落との一体感を醸成していると感じた。そのうえで、行政に頼らず、民間からの動きで修景事業が実施されている。

町立図書館である「まちとしょテラソ」は「死ぬまでに行きたい世界の図書館15」の6位に選ばれるなど、高い評価を受けつつ、町民や周辺住民に有用に使われている。建設に当たっては1年半で部会も含め50回もの、建設運営委員会を開催し町民の意見交換の上に竣工を得ている。

町民個人が町全体に対して発言でき、ほぼ固まってしまっているとの印象を与えず、議論できる環境が岩美町にとってはより重要であると感じた。

◎景観のまちづくりについて

小さな町で、民間の方が声を上げて地域を盛り上げている感じがした。行政と民間との関係がうまくできていると思う。

◎まちとしょテラソについて

世界の行ってみたい図書館にもランクインしている図書館であり、図書館まつりなどの事業も取り組んでいる。

岩美町の図書館は公民館と一緒にいるので、雰囲気は違うが、おすすめの図書、テーマ別の図書を一ヶ所に並べるなど、館内の様子は参考になると思う。

◎全体を通して

どの自治体も、観光と農業を移住・定住に活用している。

観光資源は岩美町の方が多いと思う。

メディアなどの活用はもちろん有効だと思うが、観光客の誘致はやっぱりロコミが一番だと思う。

セカンドスクールなどの取組みや修学旅行の誘致などで、岩美町に興味を持ってもらいたい。

行政の取組みを民間の方が理解していて、お互い一つのゴールに向かっている感じがした。

町がよくなることを望むのは住民であり、行政も同じだと思う。

今後、住民の皆様への理解に努めていきたい。

◎景観のまちづくりについて

昭和の合併後、岩美町に同じく平成の合併はせず、人口は1万1千人、狭い町であるが自立したまちづくりを住民との協働で実践している。

江戸時代の豪農の力により、精神的に安定した町づくりが出来上がっている。

住民同士の信頼、連帯感が高く、個人の庭を開放し、交流を深めている。歴史、文化をうまく利用しながら特産品をPRしている。大学との連携も感心した。

◎町立図書館「まちとしょテラソ」について

町には大規模な図書館であるように思えるが、住民の意見などを踏まえ、しっかりとした理念のもと、設計者と館長を全国公募するなど創意工夫で年14万人以上が利用している。すばらしい。町外の利用者も多い。

6. まとめ

小布施町は、面積19.12k㎡の小さな町であるが、江戸時代後期から、千曲川とこれに沿った大笹街道、山田街道を利用した物産・交易が盛んで、経済文化の中心として栄え、高井鴻山ら豪農・豪商が、葛飾北斎、小林一茶ら多数の文人墨客を招き、今に続く文化の薫り高い町である。この風情が、北斎館を中心に栗菓子のお店や大壁造りの民家など歴史的景観を生かしたまちづくりに活かされていた。また町の随所に民話紙芝居が設置されており、風情に趣を添えていた。

また、町並修景の取り組みやまちとしょテラソ建設などのまちづくり事業に、町民が大変積極的であり、寛大で開放的気質であることが小布施のまちづくりに繋がっていると感じた。

なお、役場内に大学の研究所を開設し、専門的意見を事業計画・実践に取り入れており、例えば、平成17年には、景観の研究に優れた実績持つ東京理科大学と協定締結し、将来を見据えたまちづくり施策の研究を、更に平成22年には第2町並修景事業に向けたまちづくりを展開するため5年間協定期間を更新。同じく平成22年、信州大学小布施町地球環境研究室を設け、バイオマス資源の活用や再生エネルギーの研究など、時代のニーズに沿った産・官・学が連携した取り組みをしていた。

本町においても協働のまちづくりを推進すべくあらゆる場面で広く町民から意見を頂く機会を設けている。また、鳥取大学や龍谷大学学生による岩美町の魅力を活かしたまちづくりの提案や、岩美町地域おこし協力隊、鳥取環境大学学生と共に平成26年度には定住対策プロジェクト・チームを設置し、定住対策への新たな提案を頂いており、今後も地域の方々、その他あらゆる人材を取り込み一緒になって考えていくことが重要であると改めて痛感した。

なお、中央公民館建替えを間近に控え、「まちとしょテラソ」建設計画や取組方法と現在の運営状況は、本町の図書館建設に大変興味深いものであり、とても参考となった。